

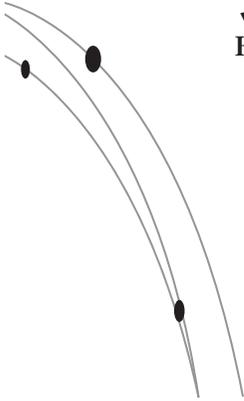
連載

フィールド・アイ Field Eye

オンタリオから——①

大阪大学 松林 哲也

Tetsuya Matsubayashi



カナダと移民

2023年4月からの在外研究のため、ほぼ10年ぶりに日本国外で生活を始めた。滞在先はカナダのオンタリオ州ロンドンである。博士課程進学から最初の就職先を退職するまで計11年間をアメリカのテキサス州で過ごしたが、このときは住んでいる地域でも所属する大学でも最後までコミュニティの一員となった気分を持てなかった。勉強や研究に忙しかったと言い訳はできるが、そんな状況でも自分が所属する地域社会や大学についてもっと関心を持って過ごせば学べるのがいくつもあったのではないかと後悔している（特に自分の研究分野にアメリカ政治や移民問題が含まれることを考えるとなおさら後悔の念が強くなる）。

ということで今回のカナダ滞在では、1年という短い期間ではあるが、日々の生活を通じてできるだけいろいろなことに興味を持つという目標を立てている。といっても、つついやるべきことの波に圧倒されてパソコンに向き合えばなしになるのであるが。

今回は移民社会としてのカナダについて書いてみる。旅行者ではなく、短期間ではあるが名目上は移民としてカナダにやってきたので、その立場からこれまでに感じたことをまとめる。

日本では、労働力不足を背景として外国人労働者や移民の受け入れについての議論が進んでいる。2022年時点では日本国外出身者の割合が増えて人口の約2.5%を占めるに至っているが、さらに積極的な受け入れを進めていこうという流れはできていないように見える。一方、カナダは（先住していた人々とともに）移民が作り上げた社会であり、他国と比べても積

極的に移民や難民を受け入れてきた歴史がある。最近では、労働力としてさらに移民を受け入れるという流れが加速している。2021年には約40万人の永住者を受け入れ、これに加えて45万件の学生ビザと42万件の労働ビザが発行された。つまり、100万人以上の人々がカナダに入国して新たに生活を始めたのである（ちなみにカナダの人口は2021年時点で3700万人）。2022年11月には、2023年から2025年にかけて新たに計150万人の永住者を受け入れる計画を連邦政府が発表した。なお、2021年時点では人口の4分の1をカナダ国外出身者が占めるに至っている。

大規模な移民社会としてのカナダを自分もいくつもの時点で体験することとなった。まずは入国である。今回の在外研究では、友人が教員として働くUniversity of Western Ontarioに受け入れてもらうことになった。家族を同伴することもあり、ビザ取得はいろいろ面倒なことが多いのではと予想していた。2022年夏頃に受け入れ先の学部の担当者にビザ（より正確には労働許可証=work permit）の手続きの依頼をしたところ、2回ほどのやりとりで学部からのinvitation letterと必要書類が届いた。それをよく読むと、自分の場合は「カナダ入国時にwork permitの申請と取得が可能」と記載されていた。家族のビザも同時に出るのかなとドキドキしながらトロントの空港に到着したところ、なんと30分ほどで手続きが完了した。拍子抜けである。これだけ移民や労働者の受入数が多いと、コストを下げるために自分のように一定の条件を満たす対象者（帰国時期や受け入れ先が決まっている）の手続きは最小限まで簡略されているのではと推測している。最近は移民の受入数やビザの発行数が多すぎて、政府の担当機関では書類の手続きにかなりの遅延が出ているそうである。

次は生活のセットアップである。想像がつく方が多いのではと思うが、日本国外での生活をスタートする最初の数週間は本当に忙しい。住居は事前に決めていたので家探しの負担はなかったが、生活に必要なもの（トイレトペーパーから食品まで）の買い出し、家具の購入、インターネット回線の開設、銀行口座の開設、運転免許取得などにかくやるのがたくさんある。

到着後の数週間にさまざまところを訪れたが、多くの場面で対応してくれたのがインド出身と思われる若者たちであった。インターネット開設に来てくれた

若い男性は数年前にこちらに来てから大学を卒業し、現在は技術者をやっていると言っていた。銀行口座の開設手続きをしてくれた同じく若い男性は、数年前にカナダに来たそうだ。彼の家族はインドにいて、母親は大学で政治学の教員をやっているそう。生活物資の購入にはウォルマートにお世話になったが、品出しや会計を担当するほぼすべての店員がインド系と思われる若者であった。インド系の若い男性がアマゾンからの荷物を運んできてくれたこともあった。こちらではファストフード店のお世話になることが多いが、お店で対応してくれる店員たちもほとんどインド系の若者である。日本の自動車運転免許証からオンタリオ州の免許証への切り替え手続きをするために運転免許センターに行った際には、ここでも老若男女問わずたくさんのインド系と思われる人たちが手続きを待っていた。

カナダに来る前は、以前に訪れたことのあるヴァンクーバーやトロントのイメージがあり、移民の多くは中国系の人たちだろうというイメージを持っていた。データを見る限り中国系の人々が多いのは間違いないのだが、最近ではインドからの移民が大きく増えているようである。2021年に受け入れられた永住者の3分の1はインド出身者であり、中国出身者は10%弱と大きな差があった。特に今回滞在しているオンタリオ州、そして北米でも有数の大規模都市であるトロントではインド系移民が急増しているようである。トロントから飛行機で1時間弱、車でも2時間のロンドンも同様の傾向があると思われる。

英語を話せるインドの人々にとって、カナダは魅力的な移住先なのだろうと推測できる。ただ、前述のようにインド系と思われる人々の多くはスーパーマーケットやファストフードの店員などエントリーレベルの職に従事していた。技能や経験を積み重ねてカナダ社会の中でステップアップすることを目標にしている

人たちが多いのではないかと思うが、母国でのキャリアなどを生かせず思うように望んだ職を得られないという声もインターネット上で見かけた。

最後は小学校である。今回はこの4月から小学4年生となる息子を連れてきた。息子がいることで、大学外でも社会との接点ができたのはありがたく感じる。こちらに来る前に前述の友人に子どものことを相談したところ、「どの小学校も外国からの子どもの受け入れに慣れているから心配は何も要らない」と言われていたのだが、実際その通りであった。お世話になる小学校を訪れたところ、英語を母語としない子どもたちを手助けする専門の教員がいること、さらに保護者を含めて相談に乗ってくれるカウンセラーが定期的に各小学校を巡回していることを知った。息子は到着後すぐに学校に通い始め、通常のクラスでの学習と同時に彼自身の進捗にあわせた英語学習を日々こなしているようである。息子は「毎日やらされるパソコン上の英語学習ソフトが簡単すぎるからつまらない」とか「英語で説明ができないので先生によく怒られる」といった不満を述べているが、日々の学習や先生たち・友人たちとの交流のおかげか、少しずつ英語が上達している。夏休み中には英語上達のための特別プログラムが用意されており、息子はそれにも参加することになった。息子の通う小学校には外国出身の子どもたちがたくさんやってくるようで、息子のようにほとんど英語を話さない子どもの受け入れは日常茶飯事のようなものである。実際、スクールバス乗り場や近所の公園で仲良くなった外国出身の親御さんたちと話す、彼らの子どもたちもほぼ英語が話せない状態で小学校に通い始めたようである。

まつばやし・てつや 大阪大学大学院国際公共政策研究科教授。主著に『何が投票率を高めるか』（有斐閣、2023年）。政治学専攻。